Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-04

明石・大久保大水害の記録 : 昭和20 年10 月9 日

森本, 眞一

(Citation)
兵庫地理,63:99-105

(Issue Date)
2018

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005210

KOBE UNIVERSITY

兵庫地理 63（2018）99-105

明石・大久保大水害の記録

―昭和 20 年 10 月 9 日―

森本 眞一

Ⅰ．はじめに

近年、津波や地震災害に関連する記念碑の発掘と記録化が進んできている。また、地球温暖化による集中豪雨が多く発生し、以前に起きた水害を検証して改めて見直して後世に伝えていこうとする動きもでてきている[1)]。ここに取り上げた明石・大久保町の二度の水害（明治 30 年と昭和 20 年）記録は同じ谷八木川で起きた水害で、豪雨による上流部の溜池の決壊による濁流が下流部の谷八木川に押し寄せ、山陽本線の土手で堰き止められ多くの被害が出た水害記録である。そして、同じ地域に繰り返された水害の背景とその要因について、当時の役場資料や聞き取り調査などにもとづいて検討したものである。

いなみ野台地の溜池決壊による同時期の水害記録としては、内田和子（2003）の台地上皿池の決壊による水害として 1945 年旧天満村・旧平岡村・旧阿閇村の事例がある[2)]。また、加古川市史資料中野村『坪刈記録』にも同地域の水害記録が若干紹介されている[3)]。これまで大久保町の水害記録として小学校の記念誌や聞き書きなど多少の報告があるが[4)]、まとまったものとしては残されていない。

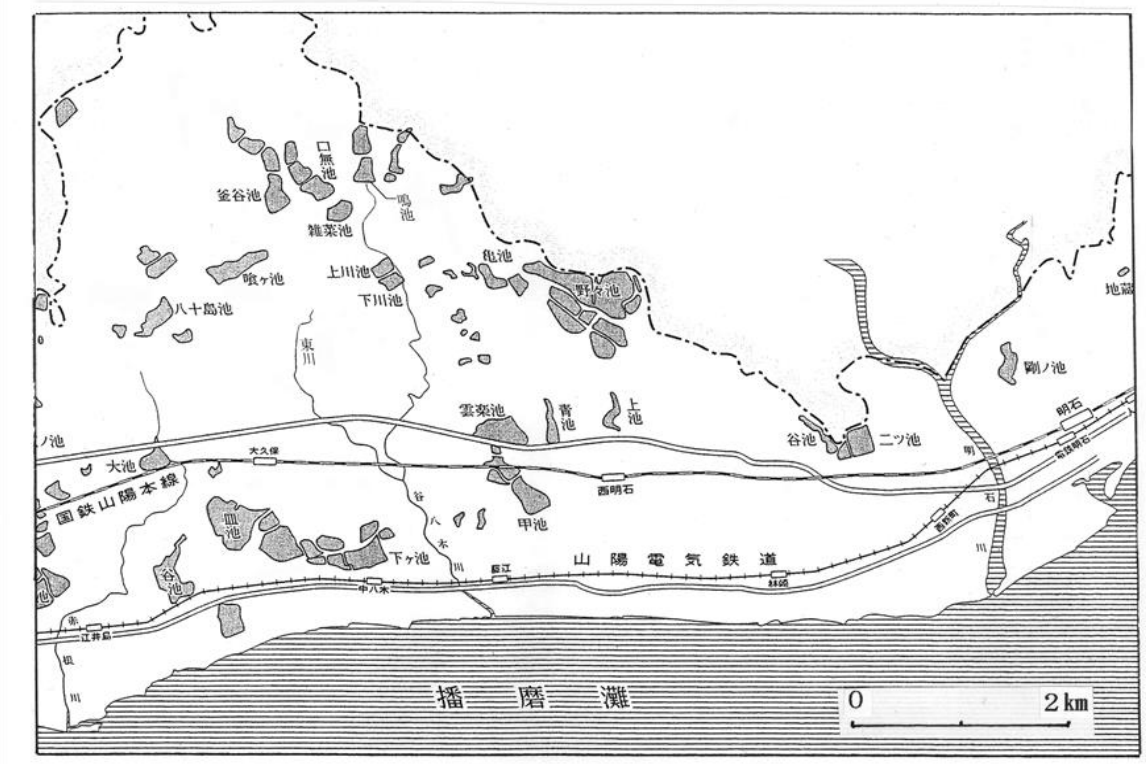
そこで、まず、兵庫県に甚大な被害を及ぼした昭和 20 年 10 月 9 日の阿久根台風の被害状況や明石・大久保町の被害状況を明らかにする。つぎに、旧大久保役場の当時の対応を現存する役場資料から検討する。そして、進駐軍や水利組合による復旧作業やその状況を新聞記事や聞き取り調査等で整理し直し、繰り返された大久保大水害の背景と要因について考察したい。

Ⅱ．地域の概観

ここに取り挙げた研究対象地域の明石市大久保町は、いなみ野台地の東端にあたり多くの溜池が存在し、かつてはキャベツ栽培や稲作を中心とした田園地帯であった[5)]。近年、大規模工場群や大型店舗の新進出などにより集合住宅地が増加し、人口増加の著しい地域である（第 1 図）。この地域は地形的には洪積台地で大久保台地とよばれている。海岸部は明石川以西の林崎から東二見にかけての高さ 12m前後の崖が続き、屏風のように切り立っていることから屏風ヶ浦とよばれている。崖の下部には屏風ヶ浦粘土層とよばれる青灰色をした粘土層が厚く広がっており、今から約 200 万年前にあった湖に堆積した地層である。崖の上部には西八木層とよばれる砂および砂礫層が堆積しており、ナウマンゾウの化石などが発見されており、今から 6～8 万年前の海進により形成された地層である。この崖を上がると平らな面が開けている。現在、ＪＲや山陽電鉄が走っている標高 15～30mの平坦地は西八木面とよばれ、6～8 万年前に海の底にあったところである。西八木面のさらに北の高丘、金ヶ崎にも標高約 35～80mの平坦な土地が広がっている。最も高い位置にある大久保町の山手台付近は今から約 20～30 万年前の海進により形成されたと考えられている[6)]（第 2 図）。

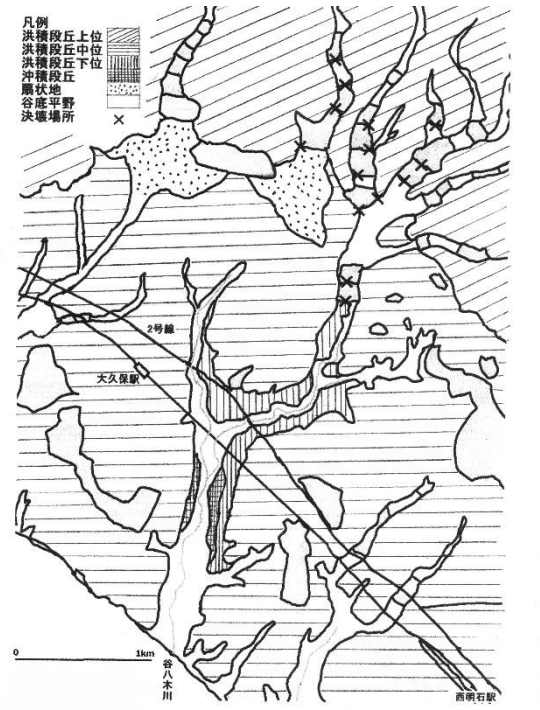
この地域には瀬戸川、赤根川、谷八木川などの小河川が、谷底平野を作って流れている。赤根川や谷八木川は北部の丘陵地域に谷頭をもつが、上流部は連結した溜池群で堰き止められ、かつての川が運んだ扇状地性堆積面を刻み込む形で二次侵食による浅い谷を作り、下流側の谷底平野に連なっている。

このような短小な河川では、豪雨時においては洪水時間が短く、上流部の溜池の満水時の落とし水が加わることが特徴として考えられている[7)]。



第１図　明石西部地域の溜池の分布（1952 年）

出典）明石市史現代編Ⅰを一部加筆



第２図　谷八木川流域の地形分類

出所）土地条件図初期整備版「高砂」（1966）図幅

Ⅲ．昭和 20 年 10 月 9 日の阿久根台風と大久保大水害

１）1945 年（昭和 20 年）10 月 9 日阿久根台風による被害状況

九州を縦断して瀬戸内海に入り、広島県に再上陸して北東進して日本海に抜けた阿久根台風は、「梅雨前線型」」の豪雨をもたらし県内に大きな被害を与えた。「兵庫県の気象～気象災害年表」によると、県内の被害は、死者 206、負傷者 92、行方不明者 25、全壊家屋 276、半壊家屋 704、流出家屋 435、床上浸水 14、644、床下浸水 36、639、等の記載がある。また、『兵庫県災害誌』によると、9 日の総雨量は 240mmに達し、とりわけ 8 日夜から 9 日午前にかけて総雨量の 73%が集中したという（第１表）。

明石市の被害状況は、死者 18 人、負傷者４人、行方不明 11 人に達し、家屋流失、崩壊 86 戸、床上浸水 4500 戸、床下浸水 1011 戸の計 5597 戸、河川ならびに沿岸道路の決壊、明石川本流・支流をあわせて 23 ヶ所、橋梁流失 12 ヶ所、船舶沈没３隻にのぼっている（明石署調査－旧市内）。

第1表　神戸市の1945年10月8日～10日の2時間雨量（単位：㎜）

日	2時	4時	6時	8時	10時	12時	14時	16時	18時	20時	22時	24時	計	最多雨量
8	―	0.2	2.4	3.0	2.4	7.1	5.7	13.9	5.0	25.2		23.1	88.0	30.0
9	65.6	58.8	38.5	40.9	5.8	6.4	7.6	6.0	4.1	4.7	1.3	0.6	240.3	49.6
10	1.7	0.7	1.4	3.4	4.5	―	―	―	0.2	1.0	6.5	7.9	27.3	10.9

出所）『兵庫県災害誌』より作成。

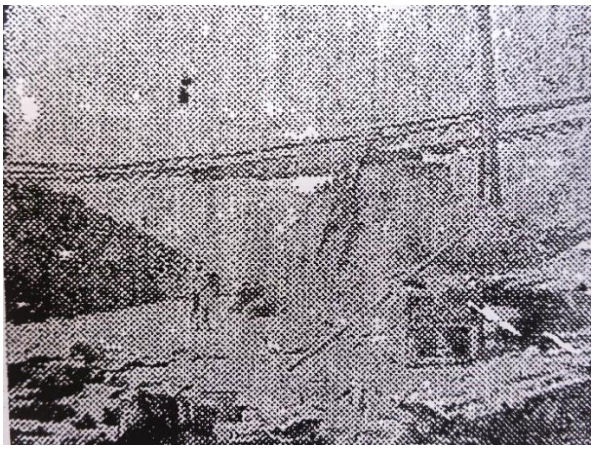


写真1　大久保町東で流出した鉄橋

出所）神戸新聞1945年10月12日付け。

この台風より前の同年9月17日鹿児島県枕崎付近に上陸した台風（枕崎台風）でも、明石市内では明石川・朝霧川が氾濫し市民を苦しめている[8]。

2）大久保町の被害状況

昭和26年明石市に合併する以前の大久保町では、どのような被害状況であったのか、記念碑（平成6年）によると、北部にあった約30ヶ所の溜池がことごとく決壊、大量の水が低地に流れ込み、約100戸が泥水につかり、17人が死亡したという[9]。さらに詳しい状況を知るため谷八木川流域の水利組合関係者等に聞き取り調査（被害状況と復旧工事について）を実施した。以下はその概要である。

① 大久保地区（旧街道沿い）

「昭和20年10月9日の早朝、夜が明ける少し前、何処からともなく「池の土手が切れた」という声が伝わってきた。様子を見に玄関に来ると、すでに戸の外には水が来ており閉まった戸の隙間から水が噴き出している。……二階に戻って西の窓から見ると一面池の様。公会堂のガラス窓の水位がだんだん上がってくる。庇までくると流されるのではないかと心配していたが、一番上のガラス辺りで上昇は止まった。しばらくすると急に水位が下がり始め、あっという間に地面が見えてきた。随分長く感じたが1時間余りの出来事だったのだろうか。」「午前9時ころ、国鉄の堤防が切れ、線路が枕木を付けたまま梯子のように空中に垂れ下がった状態になった（写真1）。当時咄嗟の判断として、避難場所として高台に位置していた大久保小学校や国鉄の土手が選ばれた。」（当時17才）

旧街道沿いの蔵の中には当時水が来たと思われる線がくっきりと残っている。また、線路下には今も当時の橋梁の一部の煉瓦の塊が沈んでいる。

② 中の番地区（釜谷池をはじめ4つの溜池を管理する水利組合）

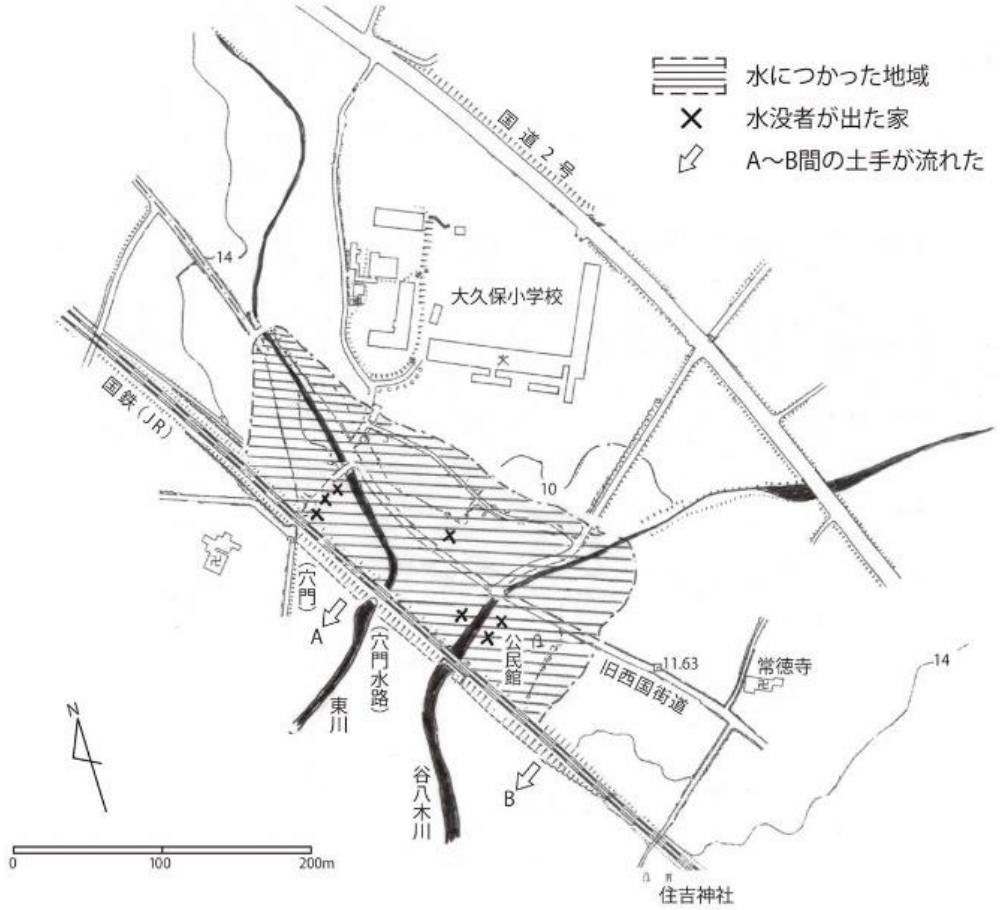
「1週間余り降り続いた10月9日早朝、教専寺の半鐘が鳴り上流の岩蛇池から切れ始め順に中笠池、稲葉池そして一番大きな釜谷池と土手が崩れ、いっきに東川を下って行った。谷八木川と国道2号線が交差する橋が落ちたと聞いた。」（当時15才）

③ 松陰地区（上川池、下川池、大池、口無池、雑菜池等を管理する水利組合）

「上流の溜池からどんどん土手が切れ始め、櫓の上から見ると、白い波がどっと押し寄せてくる感じだった。」（当時12才）

「これらの濁流は谷八木川に流れ込み、国鉄と交差する地点では、流木等で詰まりダム状となり多くの犠牲者が出ることとなった」と付け加えられた。

④ 松陰新田地区（鳴池、中鳴池などを管理する水利組合）



第3図　大久保水害図

出所）現地聞き取り調査などにより作成。

「上流の溜池から切れ始め大きな鳴池の土手もいっきに切れ、谷八木川へ流れ込んでいった。(当時14才)

なお、加古川から大久保にかけての当時の水害の状況や人々の被災状況は宮本百合子の小説『播州平野』にも詳しく描かれている[10]。

その他多くの証言をもとに大久保大水害の状況を作成したのが第3図である。釜谷池を中心とする溜池が決壊した濁流は小さく細い東川を下り、旧街道沿いを通り国鉄下の隧道へと流れ込み、一方、谷八木川沿いに分布する上川池下川池などや鳴池などはいっきに谷八木川を下り、同じく国鉄の土手へと向かったのである。そこでは上流からの流木等が詰まり、ダム化して濁流が溜まり多くの犠牲者が出たのである。平成6年に建立された記念碑には17名の犠牲者の名が刻まれている。その中には生後10ヶ月の子どもも含まれ、2名の方々が行方不明となったといわれている。

3）大久保役場の対応と溜池の復旧状況

まず、この大水害に対して旧大久保役場はどのような対応をおこなったのかを、当時の役場資料（昭和20年から24年）[11]から見ていくことにする。緊急の対応として、町長名で各部落長宛てに、以下のような通達を出している。なお日付は明記されていないが、翌朝に出されたものと思われる。

各部落長殿

当町水害罹災者救援用夜具衣類募集の件

去る10月9日ノ水害ハ其ノ被害頗ル激甚ニシテ罹災者ノ窮状 真ニ同情ニ不堪　関係部落ニ於イテ全力ヲ挙ゲテ救援復興ニ従事致サレ候

事　感激罷在候
就而　町内各部落会相互扶助ノ精神二訴へ左記要領二依リ 地元羅災者救援用夜具衣類等ヲ募集致シ度存ジ候二付イテハ羅災者ノ苦難二同情ノ上　極力目的達成二御協力相煩度
此段特二御依頼相候也

具体的には、数量は限定せず婦人会長などにも趣旨を徹底し、10 月 20 日までに目録添付などをして町役場まで届けるよう記している。また、10 月 20 日付で大久保町から兵庫県知事宛てに、災害土木復旧工事補助の申請書が提出されている[12]。 旧大久保町役場として、被災住民への救援や復旧工事に対する迅速な対応がなされていたことが窺われる。

次に、溜池が決壊した水利組合の対応を聞き取り調査を中心にみていくことにする。上述の３地区の溜池復旧状況をまとめると、早いところでは決壊後 1 週間後から水利組合が中心になり修復作業が始まり翌年の４月までかかったという。近隣の工場からトロッコやレールを借用し土手の中心に「はがね」といわれる粘土を入れる作業が行われ、男性が少ないので女性の力も借りたという。作業費は日当で支払がされたそうである。

また、１軒につき１人動員という形で修復作業が行われ、日雇い労働で賃金が支払われた（当時の記録が役場資料に残っている[13]）。溜池を多く抱える地区では４年以上かかって修復作業が行われ、しかも修復作業後も３歩植え、５歩植えといった田植えが続き、以前の姿に戻るまでには時間がかかったそうである。

このように戦後まもない労働不足の中での溜池修理作業は困難を極め、中学生はじめ女性、高齢者など村を挙げての取り組みが数年続いたのである。

４）進駐軍による復旧工事

谷八木川と国道２号線が交差する橋が落ちたことは既に記したが、その橋の復旧作業の様子が、当時の新聞記事にでている（「神戸新聞」1945 年 10 月 14 日付け）

「12 日西の風は少々強かったが久しぶりの青空、神戸の進駐軍設営隊約 50 名が明石郡大久保町大久保の国道決壊箇所の修理にトラック、ジープにまたがって早朝よりエンジンも軽くやって来た。国道の鉄橋もアメの様に宙ぶらりんに下がって復旧に相当の時日を要するものとみられていたが、午前８時作業を開始した米軍設営隊は得意の機動力と物量の力を発揮して午後４時には完全に決壊箇所に架橋、早くもトラックやジープが輪輪と渡り、在来の我が土木法では何うしても１ヶ月はかかる難作業を見事にやってのけた。……」（写真 2）

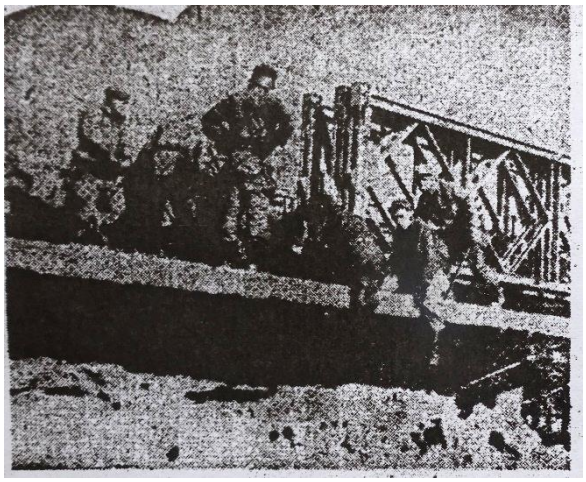


写真２　進駐軍施設部隊の急速な架橋ぶり

出所）神戸新聞 1945 年 10 月 14 日付け。

その作業をみながら、当時の人々は口々に「あんな橋を遊びながら半日で造ってしまうような国と戦争しても勝てるわけないに決まっとうやねーか」と言っていたそうだ。この進駐軍による橋の修復の様子は、大岡昇平の小説『妻』にも描かれている[14]。なお、土手が流れた国鉄の修復には約 2 年間を要し、その間、西明石と土山で折り返し運転が続いたそうである。

Ⅳ. 大久保大水害の背景と要因

冒頭で大久保水害の２つの記念碑について述べたが、明治 30 年の水害についてここで記述しておきたい。大久保町の住吉神社の境内にある水害記念碑には、以下のような記述がある[15]　。

明治21年（1888年）鉄道敷設事業が起こり、東・西両川（注:現在の谷八木川と東川）を横断して線路を築造することになった。そこで、町の代表者は鉄道会社と交渉し、東川（現谷八木川）は桁橋式、西川（現東川）は隧道式で線路を敷設し、将来両川が氾濫した場合の備えとすることにした。しかしながら、明治30年に未曾有の出水が発生し、多くの家屋・田畑が被害を受けた。明治21年に設けた桁橋や隧道では、排水面においてなお不十分であることが明らかになったのである。そこで大久保村長をはじめ有志4名が代表して、鉄道会社と交渉を行うことになった。4名は桁橋や隧道の幅を拡張するよう提議した。多くの改善点は実施されたが、桁橋と隧道の幅の拡張は認められなかった…後略。大正15年（1926年10月）

この交渉にかかわる申請書並びに交渉経過については、旧大久保役場の資料が残っている。いずれにしても結局は、地元の人々の願いは受け入れられず桁橋と隧道の幅は拡張されなかった。そして、昭和20年10月9日の大水害によって再び多くの被害を受け犠牲者をも出すことになったのである。戦後50年を前にした平成6年に改めて犠牲者を慰霊しこの水害を後世に伝えるため水害記念碑が元の公会堂（現大久保町公民館）に建立された。そして、平成10年、明治21年地元からの申請が出されて約100年後ようやく谷八木川の桁橋の拡張工事が実現したのである。

内田和子は、溜池の決壊による死者や家屋全壊のような深刻な被害について、5つに分類している[16]。その中の一つに「国道、県道級の堅固で周囲の土地より高い位置にある道路と排水河川とが交差する地点」を挙げている。そこでは一時水流が堰き止められた後、道路や橋梁が崩壊して、多量の勢いの強い水が流下して大きな被害が生じると指摘している。大久保の場合は正にこの事例に当てはまる。すなわち、一時水流が堰き止められ多くの犠牲者が出た場所は、周囲より高い位置にある国鉄の土手と谷八木川が交差する地点に当たるのである。その後、土手や橋梁が崩壊して多量の濁流が谷八木川を流下して行ったのである。

以上のような背景をもとに昭和20年10月9日の大久保大水害の要因を考察すると、①阿久根台風による大量の雨量が上流部の溜池の決壊を促したこと、②大量の雨量によって決壊した濁流が、短小な東川や谷八木川の両川に短時間に流れ込んだこと、③その濁流が一時国鉄の土手と谷八木川が交差する地点に集中し、一時堰き止められたことなどによって大きな被害が出たと考えられる。

Ⅴ．今後の課題

以上、昭和20年10月9日大久保大水害状況、旧大久保役場や地元水利組合の対応、そして進駐軍や地元の復旧の状況を明らかにし、大久保大水害の背景や要因について考察した。

最後に、その後の地元の水害対策について触れておきたい。地元では、二度と水害を起こさないための取り組みとして、上流部の溜池群の保守修築を要請・実現化してきた。同時に谷八木川の浚渫と拡大にも取り組み、「安心・安全」できるまちづくりを積極的に目指してきている。一方、大久保大水害の歴史を地域防災の視点から学ぶ取り組みも行ってきている。具体的には、1月17日に合わせた防災訓練の中に水害記念碑を巡るウォークラリー[17]、学者や研究者から水害の歴史や地元大久保大水害の実態を学ぶ地域防災講座の開催[18]、大久保地区まちづくり新聞に「大久保大水害」の歴史を紹介した特集号「河川との共生をめざして」の発行[19]、水害記録の看板を過去に決壊した溜池の土手に設置[20]など地元自治会や水利組合が中心となり積極的に取り組んでいる。

今後の研究課題としては、さらに多くの方々の大久保大水害の記憶を整理し記録する作業を早急に進めていくこと、同時に地元に残された当時の資料を発掘し継承していくこと、過去の災害から学ぶという意味で江戸時代の明石藩の記録、例えば「松平家譜」[21]の調査にも着手したいと考えている。

付記

本稿の作成にあたってご協力いただきました大久保町自治会並びに水利組合の方々、明石市文化振興課、さらに本稿をまとめるに際してご指導をいただきました兵庫教育大学の南埜 猛教授に深く感謝申し上げます。なお本研究の骨子は、兵庫地理学協会 2017 年 12 月特別例会（2017 年 12 月 10 日、於:兵庫教育大学ハーバーランドキャンパス）にて発表した。

注

1）吉越 昭久 (2014)：災害の地理学　3－5；松下 正和 (2014)：播磨の災害記念碑－安政南海地震碑・寛延二年大洪水碑　近大姫路大学人文学・人権教育研究所　175－203

2）内田 和子 (2003)：日本のため池－防災と環境保全－　海青社　103－116

3）今井 修平（1996）：中野村 坪刈記録　加古川市史史料３　81

4）大久保小学校（1977）：大久保小学校創立百周年記念誌　7；神戸新聞明石総局 (1979)：聞き書きあかし昔がたり　224－225　など

5）片山 俊夫・森本 眞一（1986）：印南野台地東端における廃止溜池の現状－明石市を事例にして－　兵庫地理 31　40－48

6）稲原 昭嘉 (1996)：明石の地形　明石市立文化博物館ニュース　1

7）建設省国土地理院（1966）：土地条件調査報告書（京都・播磨）55

8）　明石市（1999）：明石市史現代編Ⅰ　20－21

9）同様の内容が「おおくぼまちかどひろば」（大久保小学校区連合自治協議会）第３号にも掲載されている

10）宮本 百合子（1946）：「播州平野」　河出書房

11）旧大久保町役場（1945）：当町水害羅災者救援用夜具衣類募集の件　災害関係書類５

12）旧大久保町役場（1945）：明石郡大久保町災害道路・橋梁・堤防復旧工事土木費　災害関係書類５

13）旧大久保町役場（1949）：隣の村の溜池復旧工事費（人夫出役簿並に人夫賃領収書）の書類が残っており，一人一人に賃金が支払われていたことがわかる。

14）大岡 昇平（1950）：「妻」別冊文芸春秋

15）大正 15 年（1926）10 月に建てられた記念碑で文章は当時の村長によって書かれている。

16）前掲２）111

17）神戸新聞（明石版）2016 年 1 月 12 日付けには公民館前の水害記念碑を見ている記事が紹介されている。大久保小学校（1990）：５年生「大久保の道を歩く」では住吉神社前の水害記念碑を取り挙げている。

18）筆者並びに田辺 眞人氏によって「大久保大水害の状況」「災害と歴史」というテーマで講演が行われた。

19）前掲９）

20）以前に決壊した釜谷池に連なる岩蛇池と中笠池との間の土手に設置されている。

21）越前大野から明石城主となった松平直明から幕末まで（1682～1868 年）の災害も含めた藩内の出来事が細かく記録されている。

（もりもと　しんいち　神戸学院大学非常勤）